⑥ 世界にさきがけた麻酔実験

―華岡青洲―

雲平は三十両の大金のはいった縞の財布を持ったまま、紀ノ川の川べりの大和街道に立っていた。川の中にはこんもりとした茂みのある島が浮かんでいて、河原も広く、よく遊びに来る所である。

「だれが落としたんだろう。今ごろ気づいて、びっくりしてるやろ。落とし主はきっと引き返して来るにちがいない。それまで待っていよう。」

やがて、舟岡山の頂きの松に残っていた日かげがようやく消えようとするころ、しきりに物を探すような面もちでやってくる旅人がいた。雲平はいろいろ尋ねてまちがいなく落とし主だとわかったので、そのまま財布を返してやった。

家に帰ってこのことを父に告げると、

「やあ。いいことをした。きょうはめでたいぞ。雲平！えらい。わが家も将来安泰じゃ、どうれ今日は近所の人々をよんで、お祝い酒をふるまうぞ。」

父はたいそう喜んでくれた。

近所の人々の中には、
「なんと、華岡の親も親、子も子で、そろってお人よしや。」
と笑った人もいた。
このことが華岡直道（なおみち）という村医者の息子、雲平の少年時代の出来事として伝えられている。
雲平は二百余年前、紀ノ川ぞいのかたいなか、名手平山に生まれた。父のもとで、読み書きそろばんから始まって、医学のことをいろいろと教えられ、成人していったが、あるとき父にこう申し出た。
「お父さん、わたしを京都に勉強に出してください。話に聞くと、西洋から、どんどん新しい医学が入っていると言います。外科医学の方でも、オランダから次々と名医が訪れ、杉田玄白（げんぱく）先生は人体解剖の書物を、大槻玄沢（おおつきげんたく）先生は蘭学（らんがく）医書を書くと言うふうに、日進月歩の進み方です。いなかで古風な医学をやっていたのでは、時代に遅れていきます。お父さんもよく医学においては、必ずわが国に蘭学の時代が来ると言っていたでしょう」
しかしそのころ、華岡の家は息子を京都に進学させるほど、けっして豊ではなかった。父直道は雲平の気持ちはよくわかるが、医学の勉強はほかのことと違って非常に金がかかる。家の方は人手不足になるうえ、何年もかかる遊学ということは、どう算段しても無理なことであった。
ある日、妹の於勝（おいっ）と小陸（こりく）は、母親に

「おかあ様、おにい様があんなに強い決心をして、遊学なさろうとしておられるのです。どうぞ聞いてあげてください。その学資はわたくしたちいっしょうけんめいに、機を織ってかせぎます。やっぱり、おにい様のおっしゃるとおり、オランダの医学を勉強しなければだめです。そのために大勢の人々が助けられるのだと思えば、わたくしたちは、どんなに苦しくてもがんばります。」

と、こう申し出た。

願いはかなえられた。雲平は二十三歳、天に昇る心地で郷里を出た。京都に着くと、まず、吉益南涯という大家について古い医学を研究し、つづいて大和見立という先生に外科学を勉強したほか、儒学や漢文学などいろいろと研究した。

近所の家からお嫁さんをもらったのは京都遊学中のことで、留守中に式があげられた。

雲平は遊学を終えて京都から帰ってきた。

庭の薬草畑にはマンダラゲの花が一面白く咲いていた。たいへんな毒草である。雲平は青洲という名で父のあとをついで、平山の地で医業に専念したが、何しろ新しい医学を研究して来ただけに、大変評判がよかった。またそれだけに忙しかった。青洲はその中で、古今東西の書物を調べたり、山野を駆けめぐって薬草を採取したりしたが、中でも、このマンダラゲの花については特別の深い研究をしていた。

ことしも畑一面に白い花が咲いた。

「ようし。人の治療できないような難病を治してみせるぞ。世間では、外科で南ばん流だのオランダ流だの、大きな看板をかけているが、大ていは、こう薬をはったり、はりやきゅうを使う程度で、

大きな手術といっても、はれ物の頭を小さなメスで口をあけたり、切り傷を縫い合わす程度だ。」
マンダラゲの花が風に揺れているのを見ると、青洲の決意と自信はさらに深まった。
「新しい医学は身につけた。必要な医療器具や設備もできた。大手術をする勇気もそなわった。ただ残る問題は、手術をするときに患者に痛がらせないことである。これが一番の問題である。それには麻酔薬を使って、体をしびれさすことだ。」
こう考えた青洲は、それから一心にマンダラゲの花から麻酔薬を作ることの研究に没頭した。
「おかしいぞ、ねこがふらふらおどってるぞ。」
書生の一人がふれてまわったので、家中の者が、みんな集まってきた。実験に薬を飲ませたねこが、頭をおかされてしまったのだ。
青洲の研究もあと一歩である。
今度は大ぜい輪になって見物する中でねこの宙がえりだ。薬を飲ませたねこを空中高くほうり上げても、上手に四つ足で着地した。
「成功だ。薬で頭がおかされていない証拠だ。」
青洲はたいそう喜んだ。だが、人間にこの薬を試してみる方法がなかった。この研究を始めて十余年。最後のどたん場まで来た。青洲は喜びの中にもいちまつの不安を顔色に表していた。賢い母親、りっぱな妻はこれを見てとった。薬は麻沸湯と名づけられていたが、
「麻沸湯の実験にわたしを」
と、母と妻とは相前後して申し出た。

自分を産んでくれた母。大切な妻。どうしてこの危険な実験ができようか。自信はありすぎるほどあったが、さてとなると、さすがの青洲もためらった。

文化二年（一八〇五年）十月。世界に先がけること四十年。いよいよ、この全身麻酔術が成功。これを乳ガンという病気の手術に応用した。青洲四十六歳の時である。今まで治らないと思われていたこの病気が、りっぱに治ったから大変なことだ。聞き伝え集まる患者や門下生で、草深い平山は急ににぎやかになった。家も建て増した。春林軒（しゅんりんけん）という額をかかげ、年々数十人の入門者が集まり、日本医学の中心地になっていった。しかし、このかげには青洲を助けた母と妻の涙ぐましい努力があった。気の毒（どく）にも妻は実験のため、薬で目を痛め、とうとう失明してしまった。

青洲の悲しみは非常なものであった。妻のため新しく家を建て、ひまをみては妻を訪ね本を読み聞かせ、世間のよもやま話をし、また、妻が好きであった人形浄瑠璃（じょうるり）を呼び寄せて、他の患者といっしょに聞かせたりした。

明治三十一年（一八九八年）ドイツの学者グルト氏は、青洲の功績を大きく取り上げ、外科学史に書いたほか、国際外科医学長マックトーレック博士は、青洲を世界的最高外科医として、米国シカゴ市にある栄誉会館の中にまつり顕彰（けんしょう）した。